入試雑感

本年度の入試問題について、たくさんの問題に直接触れている編集委員が率直な感想を述べます。
（**太字の出典**は、本問題集に採録）

文学的文章

本年度の出題で特筆すべきは、東京大と京都大の出題内容の重なりであろう。22東京大の菅原百合絵『**クレリエール**』と23京都大の奈倉有里『**夕暮れに夜明けの歌を――文学を探しにロシアに行く**』である。東京大はフランス語、京都大の方はロシア語と対象となる言語は異なるが、外国語を習得していくときに訪れる感覚の変容など、問われている内容はほぼ同じであった。おまけに東京大で出題された菅原百合絵は京都大の先生。出題を見てお互いにびっくりしているのでは。例年どおり東京大は短くまとめ、京都大は全体を踏まえてたっぷりと書くという答え方の差異はあるものの、外国語を学ぶことの本質的な意味を問う良問であった。東北大の久世光彦『おしゃれどろぼう』もわかりやすく丁寧な設問であった。24大阪大文学部の坂崎かおる『**母の散歩**』は例年のとおり手掛かりが少ない中、自分の感覚を信じて踏み込むことを求めるような設問であった。今年は中略が多く事実関係もつかみづらいので受験生はてこずったのでないかと思われる。厳密にいうと出題者は中略を行うことで作者にとって核心ともいえる部分を削り、別の作品に仕上げているともいえる。大阪大の出題に対して、作者自身が解答をつくりネットにアップしているが、今回の出題部分からは決して読み取れないものであった。興味ある諸君は原典との比較を試みるべし。21広島大の高井有一『**少年たちの戦場**』は広島大らしい直球の出題。学童疎開をテーマに本文を丁寧に問う設問であった。できれば引率の五代先生の日記を並列してもらうとより読解が深まったのではないかと思われる。20岡山大は川上未映子『**すべて真夜中の恋人たち**』。会社に勤めながら校閲の仕事をしている主人公が、出版社の女性から認められ自信を与えてもらう場面で、文章が【一】【二】【三】と分かれ、新傾向かとも思われたが、中身は従来どおりのオーソドックスな内容であった。

注目すべきは出典かもしれない。東京大『クレリエール』は『群像』二〇二三年七月号、大阪大『母の散歩』は『文學界』二〇二三年五月号掲載で文芸雑誌からの出題であること。発行年月が新しく、入試問題として素材決定期限のぎりぎりのラインであろう。素材を探して期限ぎりぎりに見つけた出題者の喜びが伝わってくるようである。

論理的文章

本年度は、世界中で戦争や紛争がやまない状況を反映してか、社会の中で個人がいかに幸福に生きるか、ということを考えさせる文章が多くの大学で出題された。たとえば16大阪大では、この世に誕生した人間が、個人の自由と共同体の秩序の衝突の中でどう生きてきたかを歴史の中で考える文章が出題された。12神戸大の問題は、暴力というものが人間世界に深く食い込んでいることを歴史的・哲学的に考えさせる文章であった。11九州大では、今まではあまり肯定的に捉えられてこなかった「依存」というものが、実は社会や個人を支えているのだということを主張する文章が出題された。また6一橋大の問題は、人権思想が歴史の中で拡大していく過程について考察する文章であった。いずれもどうなるかわからない未来の問題に対して、過去の歴史から学ぼうとする研究者の姿勢が感じられるものであり、受験生にも社会に対する問題意識を持ってほしいという大学側の思いが伝わる出題内容であった。なお、15京都大では言語や芸術についての文章が、3広島大では身体と認識についての文章が出題されたが、いずれもオーソドックスな内容であった。

そのほかには、資本主義や国民国家など、近代の制度がもたらした現代の課題を取り上げた文章が多かった。たとえば17東京大では、市場交換と贈与交換によって成立する掛け売りは、困難を支えあう関係を構築するという文章、4東京都立大では、身体と空間の相互関係から、規範や支配の及ばないアジールが生まれるという文章、10東北大では、生産力向上や人口増をめざして国民を管理する政治観は全体主義体制につながるという文章、14北海道大では、情報化の現代、電子化された人間の身体は生身の身体を忘却しているが、ゾンビ作品はそんな身体イメージを同一化させる機能を持つという文章などが出題された。また、歴史を考察したものとして、13新潟大では、歴史的な出来事は物語形式の歴史叙述によって意味を獲得し、認識可能になるという文章も出題があった。異なる傾向としては、2名古屋大で、人間の「食」に対する価値観の変化に対応する手段として、科学技術の進歩を肯定的に捉えた文章もあった。具体例を交えた読みやすい文章も多かったが、解答には確かな読解力が求められ、難易度は高めだった。論理の流れを正確に理解し、設問をよく読んで出題の意図を的確に捉え、記述する経験を積み重ねよう。